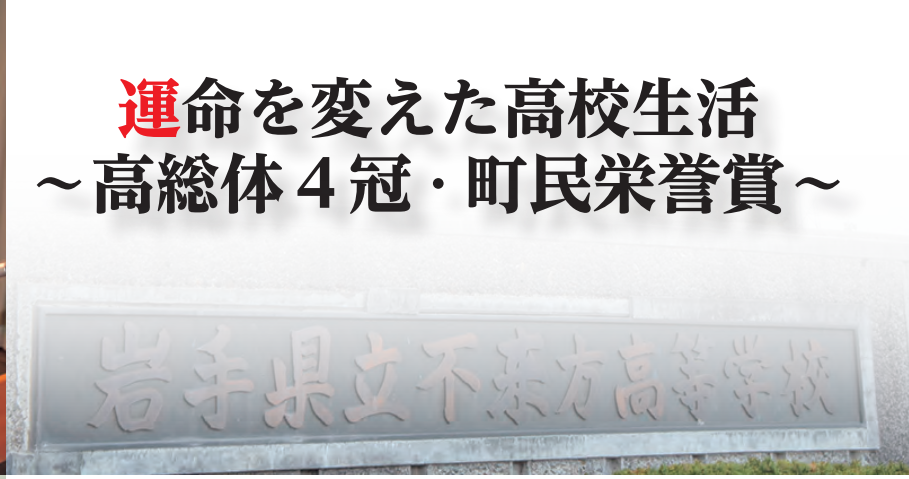
運命を変えた高校生活
～高総体４冠・町民栄誉賞～

町民栄誉賞を受賞する水本さん



水本さんは平成16年度～18年度まで在籍した不来方高校時代、高校３年時に達成したインターハイ（全国高校総体）におけるカヤックシングル・ペアでの４冠達成をはじめ、国体を含めた大舞台で、数々の成績を収めた。町では平成18年、その功績を称え、本町初の町民栄誉賞を授与した。また、平成29年には、運動部や文化部の活躍により、不来方高校として町民栄誉賞を受賞している。

不来方高校卒業後は大正大学に進学し、カヌー競技に継続して打ち込んだ。その後、長崎県に拠点を移し、挫折を経験しながらも、再起を果たし、４度目の挑戦で念願をかなえた。

高校時代、輝かしい成績を収めながらも、卒業後は苦しい日々が続いた。だが、諦めずに奮起し、13年の年月を経て、夢を手中にした背景には、不来方高校時代に培った経験、自信が大きな支えとなったに違いない。

水本さんと二人三脚で全国を目指した、同校カヌー部の小野幸一監督に話を聞くと、水本さんの強さの根源が垣間見えた。

高総体４冠を果たした当時の
水本さんと北田智充さん（右から）

小野幸一監督

カヌー部監督・小野幸一が語る 高校３年間の軌跡

「水本がカヌー部に入ってきて、始めの頃は何度も水の中に落ちていたことを思い出す」。そう語るのは、水本さんの高校時代、3年間を支えた不来方高校カヌー部・小野幸一監督だ。日本代表選手にまで成長した水本さんも、最初は他と変わらない、ごく普通の生徒だった。

中学時代は野球部で、高校からカヌーを始めた水本さん。当初は初心者で目が留まるような存在ではなかったが、1年の秋には、既に才能の片りんを見せ始めていた。その年の国体出場を控えていた3年生との練習レースで、ほぼ互角の勝負を展開。終盤は失速したものの、そのレース内容は小野監督を驚かせた。

「体力の差で、最後までペースは持たなかった。だが、体の使い方というか『体幹でこぐ』ということが、昔から上手だったと思う」と評した。

水本さんの脅威の成長は、小野監督を焦らせた。

これはやばいぞ―。

小野監督は、自身の専門外である種目・カヤックについて、猛勉強を開始。水本さんの上達を支えるべく、より深く、種目について研究を進めていった。

小野監督の読み通り、水本さんは高校2年時の大会で頭角を現す。初めて出場したインターハイでは、カヤックペア２００㍍で、同級生の北田智充さんと組み優勝。この他、カヤックシングルの2種目でも入賞。その年の岡山国体では、県勢として17年ぶりの入賞を果たした。

高校3年時のインターハイでは、カヤックシングル・ペアの各２００㍍、５００㍍を制覇。4冠達成という快挙は、3年間の集大成が表れた瞬間だった。

小野監督は「大きなフォーム、後半の苦しい場面で頑張れるということが、水本の持ち味。今まで何度も挑戦してきて、オリンピック出場が決まったことは、『本当に良かった』という言葉以外に出てこない。水本の存在は、これからオリンピックを目指す子どもたちの励みにもなる」とし、大きく育った教え子の姿に目を細めた。

御所湖を背に先輩・水本さんを囲む不来方高校カヌー部の生徒ら

水本さん（右）からアドバイスを受ける部員

思い出の地を訪ねる

水本さんは９月13日、不来方高校カヌー部が練習場としている盛岡市の御所湖を訪れ、部活動に参加した。約３時間、生徒らは水本さんと練習に励み、湖上でアドバイスを求めるなどして、偉大な先輩選手との有意義な時間を過ごした。

水本さんも高校時代、部活に励んでいたこの場所。青春時代を過ごした思い出の地で、訪れるのは約７年ぶりとなった。

五十嵐陽世さん（３年）
茨城国体・本県代表

パドルでの水の捉え方や体の回し方など、自分とはぜんぜん違うレベルで、見ているだけでも学ぶことが多かった。

国体の表彰台を目指して、これからの練習に取り組んでいきたい。

田中大暉君（３年）
茨城国体・本県代表

スタートが苦手なので、改善するための練習方法や、意識の持ち方などを聞くことができ、勉強になった。

国体では、表彰台に立てるよう、アドバイスを生かして頑張りたい。

藤原聡子さん（２年）
矢巾北中学校出身

高校に、トロフィーと一緒に写真が置いてあるので、すごい選手が先輩にいることは知っていた。

直接、オリンピックに出場する選手と話せる機会は貴重。きょう学んだことを今後のプレーに生かしたい。

舘澤滉大君（１年）
矢巾中学校出身

いわてスーパーキッズの競技体験でカヌーに興味を持ち、入部した。

水本さんは、パドルの一こぎで進む距離が長くて、実力の高さを感じた。

インターハイで優勝できるような選手になれるよう、頑張っていきたい。